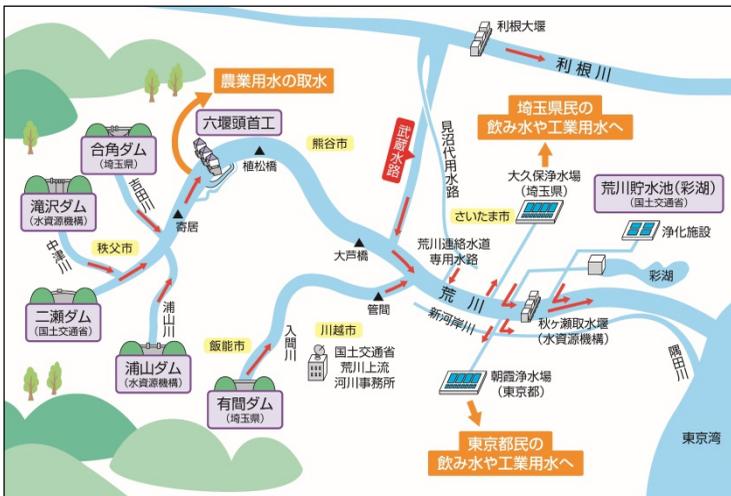


武蔵水路

～首都圏を水不足から救った「救世主」～

利根川水系の豊かな水を荒川に運び、日々首都圏を支えている水路です。



武蔵水路位置図



取水口である利根大堰

荒川総合開発と武蔵水路

昭和三十年代後半からの国内は経済の高度成長期に入り、人口の大都市への集中・大都市周辺の都市化の現象が促進されました。特に東京への人口集中は激しく、埼玉県南部は都市化の渦に巻き込まれていきます。これら大都市の肥大化と周辺の都市化現象は、都市の飲料水の不足を招くことになりました。

折しも1964（昭和39）年10月にはオリンピック東京大会が開かれることになっており、水不足解消の緊急の課題となりました。政府はすでに1961（昭和36）年に「水資源開発促進法」を制定し、「水資源開発公団」を発足、都市の水不足解消に当たりました。東京の水不足は利根川からの導水で解決を図ることになり、こうして利根導水路事業の一環として「武蔵水路」が建設されたのです。

武蔵水路の役割

武蔵水路は、利根川と荒川を結ぶ延長14.5kmの水路で3つの役割を担っています。

1. 都市用水の導水

利根大堰で取水した東京都と埼玉県の都市用水を荒川へ導水しています。(導水した水は、下流の秋ヶ瀬取水堰などで取水され、東京都の朝霞浄水場や埼玉県の久保浄水場などへ送られています。)

2. 浄化用水の導水

荒川水系の水質改善のため、浄化用水を導水しています。浄化用水は、秋ヶ瀬取水堰から新河岸川へ朝霞水路を通じて流れこみ、下流の隅田川の浄化も行なっています。

3. 周辺地域の内水排除、都市用水と浄化用水の導水に支障のない範囲で、周辺地区の河川の洪水や市街地からの出水を取りこみ、荒川に排水しています。



現在の武蔵水路

2016（平成28）年に武蔵水路の改築工事が完了

地盤沈下や老朽化による通水能力の低下、事故発生の危険性を踏まえ、武蔵水路では、2010（平成22）年8月より、約6年の歳月をかけ、14.5kmの開水路、1排水機場、3水門及び6放流口などの施設改築が行われました。

これにより、通水機能の回復と、施設の耐震化が図られました。

また、水路周辺地区の浸水被害の軽減のため、内水排除機能の確保・強化もされました。荒川水系の水質改善のため、これまでと同様に利根川から浄化用水の導水も行われています。

武蔵水路の諸元

水路形式	鉄筋コンクリートフルーム水路
延長	約14.5km
最大導水量	毎秒50m ³
主な附帯施設	<ul style="list-style-type: none"> ・流量調節堰（1ヶ所） ・伏越（8ヶ所） ・樋管 ・制水ゲート（5ヶ所） ・放流口（6ヶ所） ・水門（3ヶ所） ・排水機場

コラム 武蔵水路の合流点 糠田地区の昔

現在の武蔵水路と荒川が合流する糠田地区は、昔をたどると糠田河岸といわれ、江戸後期には確認されています。

荷を扱う問屋の数は、江戸時代後期の文化期（1804（文化元）年～1818（文政元）年）で2軒、明治初期には4軒で、舟16艘を数えていました。鉄道の開通以降は徐々に衰退し、その後は砂利あげや、自家用の舟を繋留する場所になりました。

1918（大正7）年から始まる荒川上流部改修に伴い、河岸周辺の住民が集団移住したため現在は全く面影もなくなりましたが、河岸場には昭和初期まで私営の渡しがあり、180間（約327m）の川幅を対岸の吉見町明秋まで2艘の船が連絡していたと伝えられています。



糠田の合流点

アクセス

武蔵水路合流点

交通：JR高崎線「鴻巣駅」より、川越観光バス「東松山駅」行き「御成河岸」下車、徒歩約10分

住所：埼玉県鴻巣市糠田



武蔵水路 合流点